

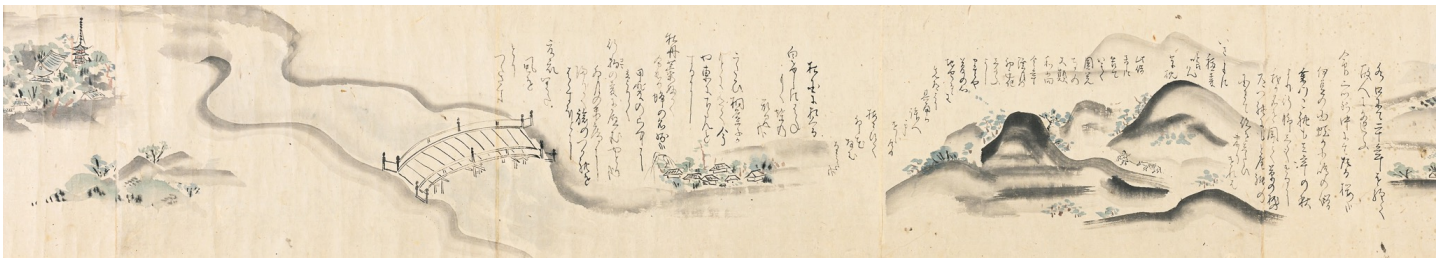
2022.5  
福田美術館

報道関係者各位

## 松尾芭蕉 直筆《野ざらし紀行図巻》を再発見

紀行文「奥のほそ道」において、「古池や 蛙とびこむ 水の音」や「閑さや 岩にしみ入る 蟬の声」などを詠んだことで知られる松尾芭蕉は、俳句という文芸を和歌とならぶ文学的地位へ高めました。このたび、芭蕉が40代の頃に江戸を出発し近畿圏を巡って自書した《野ざらし紀行図巻》が再発見され、福田美術館の展覧会において初公開されます。

芭蕉自筆の「野ざらし紀行」は、これまで天理本（天理大学附属天理図書館蔵）以外に本作しか確認されておらず、教科書や古典全集のテキストとしてはこちらが一般的に用いられています。また、紀行文全体にわたって書とともに挿絵が描かれた大変珍しいものであり、本文との関連性を含め、芭蕉を研究する上で非常に貴重です。



### 「野ざらし紀行図巻」先行記者発表

福田美術館では企画展「芭蕉と蕪村と若冲」にて本作の展示を予定しておりますが、一般公開に先行し、報道関係者向け発表会を開催いたします。当日は、松尾芭蕉・与謝蕪村をはじめとする俳諧研究の第一人者である藤田真一氏（関西大学名誉教授）をお招きし、本作の意義についてお話しいただきます。

日時 2022年5月24日(火) 10:00～11:00  
場所 嵯峨嵐山文華館 2F畳ギャラリー

※一般向けの展示は福田美術館2F展示室となりますが、報道関係者向け発表の会場は嵯峨嵐山文華館の2F畳ギャラリーとなります。ご注意ください。



企画展「芭蕉と蕪村と若冲」

2022年10月22日(土)～2023年1月9日(月・祝)  
嵯峨嵐山文華館・福田美術館共同開催

※詳しくは5、6Pを参照



<藤田真一氏プロフィール>…関西大学名誉教授。江戸時代の俳諧研究を中心とする国文学者。『蕪村』（岩波新書）、『蕪村 俳諧雄心』（若草書店）、『蕪村余興』（岩波書店）、『俳句のきた道—芭蕉・蕪村・一茶』（岩波ジュニア新書）など著書多数。

## 《野ざらし紀行図巻》の注目点

### ●約80年ぶりに一般公開※か

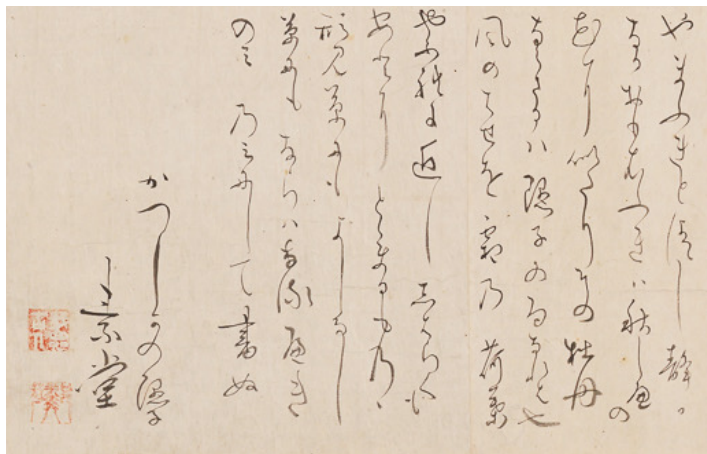
→1942年の展覧会以来一般公開された記録がない※  
(少なくとも半世紀以上は世に出たことはない)

### ●芭蕉自筆としては天理本のほか本作しか確認されていない

### ●はっきりと時期のわかる芭蕉の筆跡と画作が一望できる (天理本には挿絵はない)

### ●本文と挿絵がいかなる関連性を持って描かれているかが 検証できる

### ●今後の研究資料としての価値がある (どういう工程で本文 と挿絵を施したか、絵と文との関係性など)



### ●芭蕉と交流のあった俳人、山口素堂による 序文がある (天理本にはない)

### ●『芭蕉全図譜』 (岩波書店) に所載の筆跡 との比較検討によって、真筆であると確認 される

※リリース時点の確認に基づく情報。諸説あり

《野ざらし紀行図巻》の山口素堂による序文

## 松尾芭蕉について

○1644年、伊賀市・藤堂藩の下級武士松尾家に次男として生まれる

○20歳前に藤堂家侍大将藤堂良忠に仕え、そこで俳諧をはじめ

○29歳の頃、江戸にでる

○35～6歳の頃「宗匠立机」して正式に俳諧宗匠と認められる

○貞享元年 (1684) 8月帰郷。翌年4月江戸にもどる。

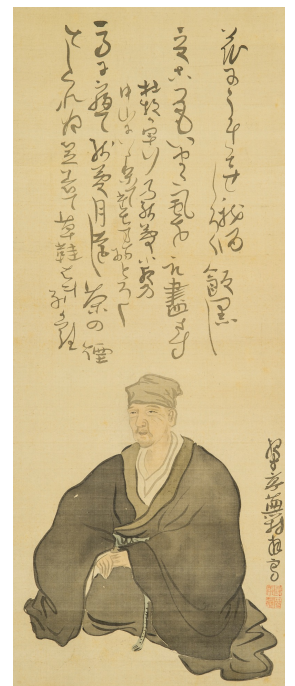
のち連句集「冬の日」を京で出版。芭蕉として全国的に知られる。

→この旅を素材にしたのが最初の紀行文『野ざらし紀行』

○元禄2年 (1689) 3月、奥州・北陸旅行

○元禄7年 (1694) 4月、『奥の細道』清書完成

○正保元年～元禄7年 (1694年) 大阪市御堂筋本町にて没する



与謝蕪村《松尾芭蕉像》

# 「野ざらし紀行」について

「野ざらし紀行」は貞享2年（1685）に初稿したとされ、松尾芭蕉40代の貞享元年8月に江戸を出立し、貞享2年正月までの間に伊勢から伊賀、大和、近江、尾張を巡り、再び伊賀を経由して京より近江、尾張を通り4月末に江戸に帰庵した行程と道中に詠んだ歌を記したものだ。

蕉風と呼ばれる芭蕉の俳風が完成されるきっかけとなったと思われます。

「草枕」「野晒紀行」「甲子吟行」「芭蕉翁道の記」などとも呼ばれ、自筆の題簽がある（※1）  
「奥の細道」とは異なり、芭蕉自身による表題はありません。

※1…素菴清書本

## ●自筆本…天理本（天理大学附属天理図書館蔵）

→福田本とほぼ同じ内容であるが挿絵は無し。福田本よりも先行して書かれている福田本（福田美術館現蔵／過去に御雲本、藤田本とも）←今回再発見された本書

## ●写本…三康本（濁子書写画卷／三康図書館蔵）、狐屋本（狐屋写／彦根専宗寺蔵）、蕪村写本（蕪村写書画屏風）、名称寺本（『芭蕉行脚乞食袋』所収／奈良県名称寺蔵）

## ●版本…泊船本（元禄11年刊『泊船集』所収）

波静本（安永9年刊、今回の福田本を元にするが、挿絵は無し）

## 野ざらし紀行経路

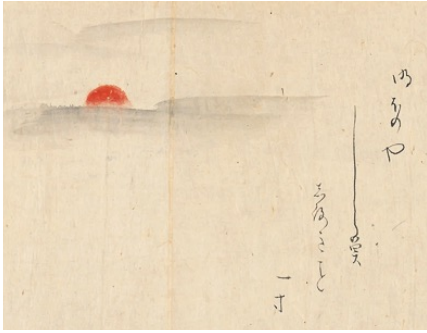


----- 故郷の伊賀に2回帰省して年越し

須磨対水筆  
《呉春筆松尾芭蕉像写し》



野ざらし紀行記載の名句



「桑名」  
 一寸  
 しろきこと  
 しら魚  
 明ぼのや

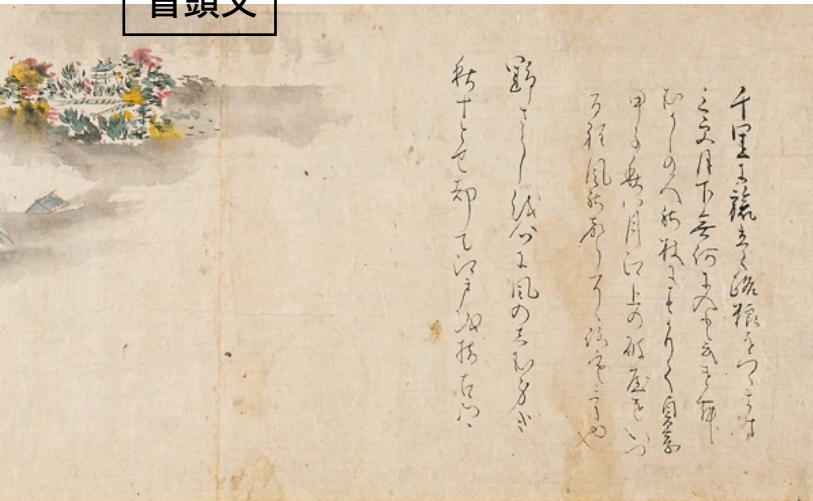


「伊賀」  
 年暮ぬ  
 笠きて草鞋  
 はきながら



「奈良」  
 水とりや  
 氷の僧の  
 沓の音

冒頭文



千里に旅立て路糧（かて）を  
 つつまず、三更月下無何に入  
 と云けむ、むかしの人の杖に  
 すがりて、貞享甲子秋八月江  
 上の破屋をいづる程、風の声  
 そぞろ寒気也。  
 野ざらしを心に風のしむ身哉  
 秋十とせ却て江戸を指古郷

末尾



卯月の末、庵に帰りて旅のつ  
 かれをはらすほどに、  
 夏衣いまだ風をとりつくさず

松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》（部分）

# 企画展「芭蕉と蕪村と若冲」

《野ざらし紀行図巻》が再発見されたことを記念し、福田美術館と嵯峨嵐山文華館が共同で展覧会を開催いたします。本展は、与謝蕪村をキーパーソンとして、蕪村が憧れた松尾芭蕉と、蕪村と同じ年に生まれた伊藤若冲、三人の足跡を辿るものです。

芭蕉の死後50年が経過した1743年頃から、芭蕉を顕彰する動きが盛んになりました。この運動を京都で牽引したのが、与謝蕪村です。蕪村は20代から江戸で俳諧を学んだ後、およそ10年間かけて、北関東から東北地方を僧侶として遊歴。各地の歌枕や、芭蕉が訪ねた場所を巡ります。42歳頃からは京都に定住し、中国の南宗画に学びながら山水図を描き、以後絵と発句を書き添えた「俳画」という新しいジャンルを確立しました。



松尾芭蕉《「朝顔に」自画讃》（部分）



与謝蕪村《筏士画讃》（部分）



伊藤若冲《牡丹図》（部分）

## 第1会場：嵯峨嵐山文華館

第1会場の嵯峨嵐山文華館では、芭蕉の俳句や絵画と共に、後世の画家たちが描いた《芭蕉図》の数々を展示。また、芭蕉に憧れてやまなかった蕪村の手による俳画もご紹介します。さらにパトロンや弟子たちとの関係が窺える蕪村直筆の手紙や、弟子たちの作品もご覧いただけます。



中村芳中《芭蕉像》（部分）

## 第2会場：福田美術館

蕪村と同じ年に京都で生まれた伊藤若冲は、四条通界隈の非常に近い場所に住んでいたにもかかわらず、現在のところ互いの交流を示す史料は確認されていません。

第2会場となる福田美術館では、芭蕉の自筆自画《野ざらし紀行図巻》の特別公開（通期／全て展示）とともに、若冲筆の《蕪に双鶏図》や蕪村筆《猛虎飛瀑図》など、若冲と蕪村の代表作を多数展示いたします。当時の最先端の技法を真摯に学びとり、己の画風に取り込もうとした2人の努力の跡をご覧ください。



伊藤若冲《蕪に双鶏図》（部分）

※期間中一部展示変えあり

## 企画展概要

企画展名	「芭蕉と蕪村と若冲」
開催日程	2022年10月22日（土）～2023年1月9日（月・祝） ●前期…2022年10月22日（土）～11月28日（月） ●後期…11月30日（水）～2023年1月9日（月・祝）
主催	嵯峨嵐山文華館・福田美術館
休館	毎週火曜日（但し11月中は休まず開館）、年末年始（2022年12月30日～2023年1月1日）
場所	○第1会場…嵯峨嵐山文華館 〒616-8385 京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町11 <a href="http://www.samac.jp/">http://www.samac.jp/</a> ○第2会場…福田美術館 〒616-8385 京都府京都市右京区嵯峨天龍寺芒ノ馬場町3-16 <a href="https://fukuda-art-museum.jp/">https://fukuda-art-museum.jp/</a>
料金	< 嵯峨嵐山文華館と福田美術館の二館共通券 > 一般・大学生 ¥2,000/高校生 ¥1,000/小中学生 ¥550 障がい者と介添人1名まで 各¥1,000 < 嵯峨嵐山文華館 > 一般・大学生 ¥900/高校生 ¥500/小中学 ¥300 障がい者と介添人1名まで 各¥500 < 福田美術館 > 一般・大学生 ¥1,300/高校生 ¥700/小中学 ¥400 障がい者と介添人1名まで 各¥700

担当学芸員：岡田秀之  
広報：中島真帆

### 本展に関するお問い合わせ

福田美術館・嵯峨嵐山文華館 広報事務局（ウインダム内）

TEL 03-6661-9448 FAX 03-3664-3833

Email 福田美術館：[fukudamuseum@windam.co.jp](mailto:fukudamuseum@windam.co.jp) ←野ざらし紀行図巻の記事に関してはこちら  
嵯峨嵐山文華館：[samac@windam.co.jp](mailto:samac@windam.co.jp)

〒103-0014 東京都中央区日本橋蛸殻町1-28-9-4F  
「福田美術館」広報事務局

担当：沼澤、多田

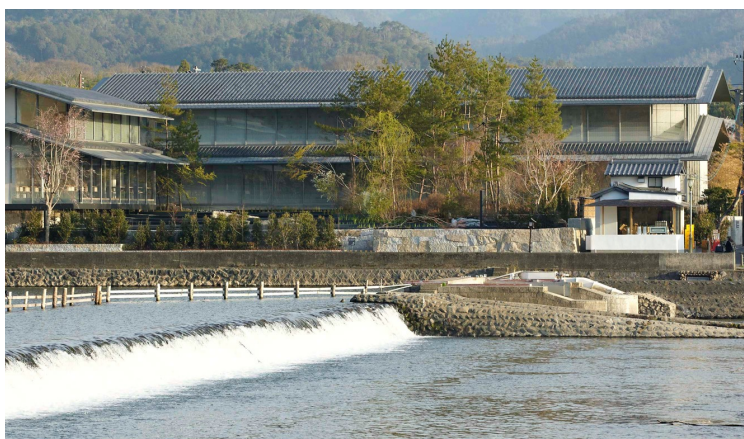


## 福田美術館について

### 美しい自然と日本美術の融和。日本文化の新たな発信拠点として

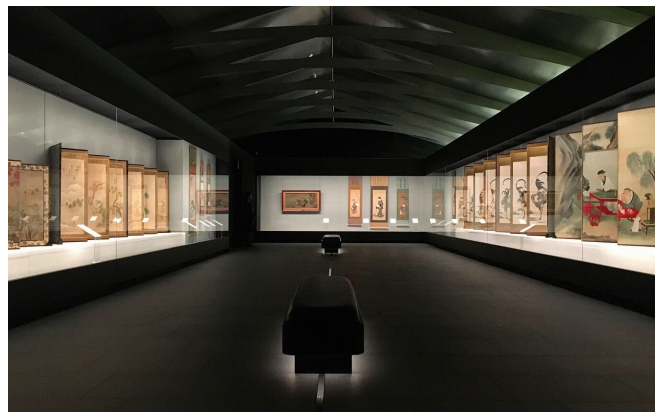
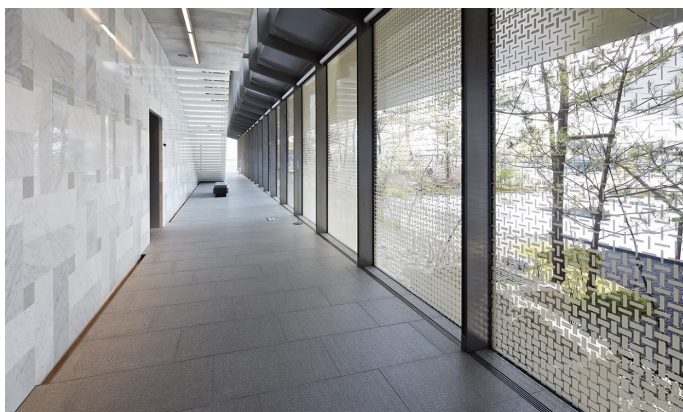
京都・嵯峨嵐山は古来歌枕でもある場所で、多くの貴族や文化人に愛され芸術家たちが優れた作品を生み出す源泉となってきました。福田美術館は「100年続く美術館」をコンセプトに、現代まで受け継がれてきた日本文化を次世代に伝え、さらなる発展へとつなぐ美術館を目指します。

オーナーである福田吉孝は京都に生まれ育ち、そこで事業を興し、今日まで続けてきたことに対し、地元の方々のご支援とこの地に恩返しをしたいという思いから、2019年10月、美術館の設立に至りました。今や日本国内だけでなく、世界中から多くの人々が訪れる観光地である嵐山。その中でも渡月橋を望む大堰川（桂川）沿いの景勝地に位置し、四季折々でそれぞれに変化する風景は1000年変わらず人々を魅了してきました。この美しい自然とともに日本美術の名品を愉しんでいただくことで、嵐山が世界有数の文化発信地となることを願います。



### 嵐山にふさわしい、未来へむけた日本建築の形

福田美術館の建築を手掛けた安田幸一氏は、「蔵」をイメージした展示室や外の自然とのつながりを感じられる「縁側」のような廊下など、伝統的な京町家のエッセンスを踏まえつつ、これから100年のスタンダードとなるような新しい日本建築を目指しました。また、庭には大堰川に連なる水鏡のごとく嵐山を映し出す水盤が設けられており、渡月橋が最も美しく一望できるカフェからは最高の眺めを味わうことができます。

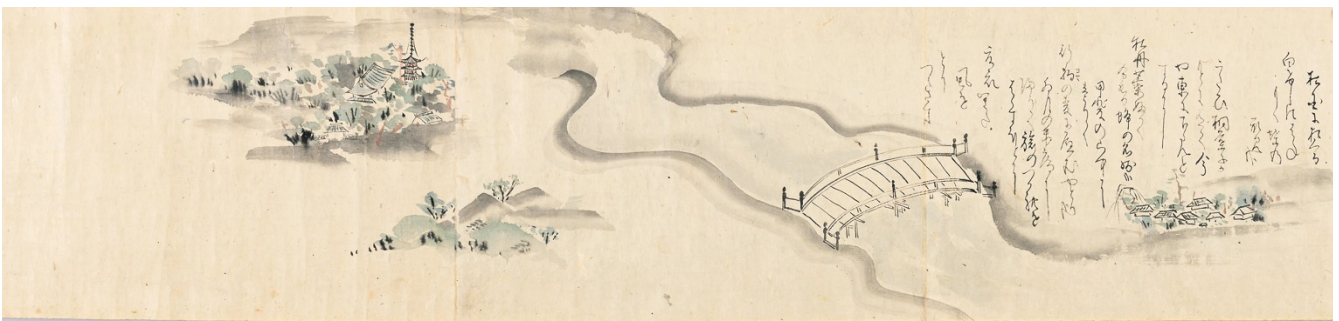




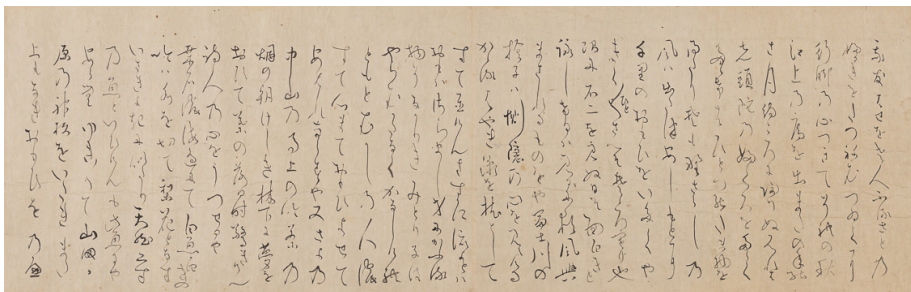
《野ざらし紀行図巻》再発見 プレス用画像一覧\_1



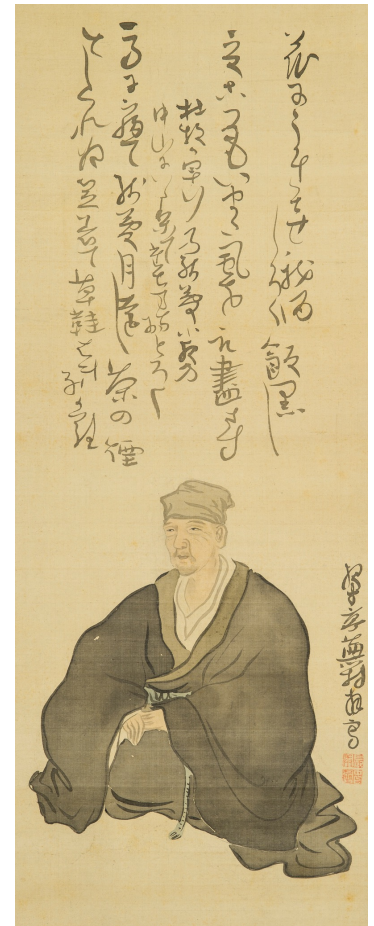
01\_松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》(冒頭部分) 場所：小田原付近か



02\_松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》(末尾部分) 場所：隅田川と上野



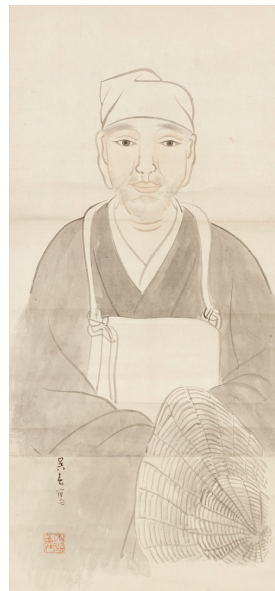
03\_山口素堂による序文(部分)



06 与謝蕪村《松尾芭蕉像》



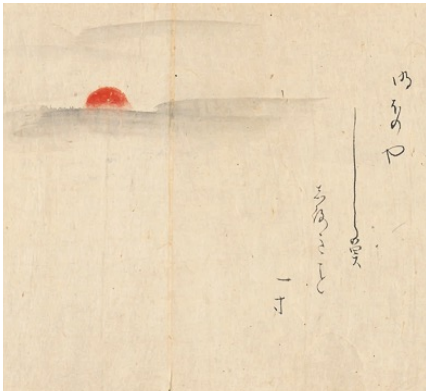
04 《野ざらし紀行図巻》  
卷子



05 須磨対水  
《呉春筆松尾芭蕉像写し》



《野ざらし紀行図巻》再発見 プレス用画像一覧\_2



07\_松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》(部分)

場所：桑名 地藏堂付近か

明ぼのやしら魚しろきこと一寸



08\_松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》(部分)

場所：伊賀上野

年暮ぬ笠きて草鞋はきながら



09\_松尾芭蕉《野ざらし紀行図巻》(部分)

場所：奈良 二月堂

水とりや氷の僧の沓の音



10\_藤田真一氏



11\_与謝蕪村《「いかだしの」自画賛》

※作品の所蔵は全て福田美術館蔵